

|          |   |
|----------|---|
| 氏名       | 根木 修  |
| 学位       | 博士  |
| 専攻分野の名称  | 文学  |
| 学位授与番号   | 博甲第4187号  |
| 学位授与の日付  | 平成22年 3月25日   |
| 学位授与の要件  | 社会文化科学研究科社会文化学専攻<br>(学位規則(文部省令)第4条第1項該当)              |
| 学位論文題目   | 吉備地域における水稲農耕発達過程の研究                                   |
| 学位論文審査委員 | 主査・准教授 松木 武彦 教授 新納 泉<br>教授 倉地 克直 准教授 松本 直子<br>教授 渡邊 護 |

## 学位論文内容の要旨

本論文は、弥生時代から近世に至る吉備地域の水稲農耕の実態を、考古学を中心としつつ、民俗学・文献史学・古典文学・動植物生態学などの方法や知見をも活用しながら復元してその歴史的な変化をあとづけるとともに、吉備地域の地域的特質にも言及しようとしたものである。

第1章で研究史を整理してこれまでの成果と今後の課題を明らかにした後、第2章では、水稲農耕が展開された吉備地域の自然環境および歴史的環境を叙述した。

第3章からは本格的な資料の提示と分析に入り、弥生時代の木製農耕具と水田の考古学的研究、および、水田という新しい環境に生息する小動物・鳥類・魚類が表現された考古資料の検討を通じて、初期農耕の具体相を明らかにした。さらに、種籾使用量の歴史的な変化の試算を前提として水稲農耕の生産力発展の過程を具体的に想定した。

第4章では、第3章で推測した生産力発展の過程を軸に、旭川ならびに吉井川の下流地域で展開した古代条里制や中世水田開発の実態を、発掘資料や地理的な分析を通じて復元し、さらに考古学のほか古典文学の資料などを用いて、そのような水稲農耕にまつわって行なわれた儀礼の展開過程にも言及した。

第5章では、農耕とそれに関連する土木技術や石工技術に着目し、文書記録を参照しながらその技術的展開をあとづけ、大規模な開墾を前提とした近世の水稲農耕技術の確立過程を論じたのち、最後に第6章で、研究の総括と展望を行なった。

## 学位論文審査結果の要旨

審査会では、学位論文の内容について1時間20分程度の口頭発表の後で、審査委員による質疑応答および講評を行った。総合的には、岡山県地方の弥生時代から近世に至る水稲農耕の実態を、考古学を中心として、歴史学・古典文学・民俗学・動植物生態学などの諸分野にわたるさまざまな資料から多角的にあとづけたことが評価された。

審議の過程では、各審査委員から、資料を踏まえた論の展開上さらに厳密に論証を加えるべき箇所が見受けられることが指摘された。とくに種籾の必要量の試算から稲の収穫量の推移を論じた部分は以後の立論の前提となるだけに、資料的な限界はあるが、さらに厳密な方法と試算の努力を続ける必要があることが強調された。また、水稲農耕の展開過程を叙述する際には、歴史的な論理性の深化に努めるとともに、日本列島における吉備地域の特質にも具体的に言及し、それを論文全体の総括部分

に盛り込むことがより望ましいとの意見が出された。さらに、近世の農耕技術と石工技術の関連を論じる箇所においては、水稻農耕やそれに伴う土木技術の多様な実態を踏まえたうえでその歴史的展開を復元することにより、論の内容をさらに豊かなものにできるのではないかという提言もあった。そのほか、近年の発掘成果に基づく条里復元など考古学分野の最新成果の参照や、『万葉集』の解釈を中心とする古典文学の資料の使い方などについても議論がなされ、これらに対する著者の方針や姿勢も説明された。

以上のような指摘や提言はあったが、その多くは今後のさらなる研究の精度の向上と理論的な発展を促すものであり、著者の応答もそれを予測させるものであった。さまざまな分野の資料に関する幅広い知識を動員して組み立てた本研究は、地域の文化振興という側面で社会に貢献することが期待される点からも、学位論文として十分な意義と内容をもつものであるということで審査委員全員の意見が一致し、合格と判定した。